

生きがいの創出による地方都市の活性化

— 岡山県倉敷市のケース —

The Vitalization of Local City by Creation of Reason for Living
— The Case of KURASHIKI City in OKAYAMA Prefecture —

山下 景秋

1. 生きがいの創出によるひととまちの活性化

生きがいの創出

中国は2008年の北京オリンピックを挟んで昇竜の勢いで飛躍を続けており、1964年の東京オリンピック頃の活況を呈していた日本を彷彿とさせる。現在の中国人もそうだが、当時の日本人の目は目標に向かってらんらんと輝いていた。

それに対して現在の日本はどうだろうか。若者達は目から力を失い、高齢者は時間をどのように過ごせばよいか思い悩んでいるように見える。そんな彼ら（そして私たち）とて、人生に目標を見つけ生きがいを感じることができれば、もっと生き生きとするはずである。そして人々が生き生きすれば、まちが元気になるはずである。

芸術と国際貢献による活性化

岡山には「芸術」と「国際貢献」という、他の地域にはない「売り」がある。岡山の人達がこの2大柱を目標にし、これを生きがいにすることができれば、もっと元気になれるはずである。

筆者は、2005年に『倉敷芸術都市構想』という構想を発表した。この構想は、倉敷が芸術によってまちおこしをすること、また芸科大（倉敷芸術科学大学）などの学生がキャンパスからまちへ出て、芸術を中心にまちおこしに貢献し、またこれにより生きがいや仕事を見つけてほしいというものだった。この構想がもとになって、芸科大は現代GPに採択され、いま芸科大は大学をあげてこの活動を行いつつある。この活動が市民を巻き込んでさらに大きくなり、芸術によるまちおこしが本格化することを期待したい。

一方、岡山県民には、困っている人々に手をさしのべ、共に助け合うという心がある、と人間・社会学系社会科学研究室

いわれている。貧困児童の救済と教育を目的とする岡山孤児院を創設した石井十次や現在のAMD A（アジア医師連絡協議会）は、その代表例であり象徴である。

岡山県はこの特性を生かして国際貢献先進県を目指そうとしており、元国連事務次長の明石康氏や大原謙一郎氏を中心として発足した「岡山発の国際貢献を考える会」が、平成15年に『21世紀初頭における岡山県の取り組むべき国際貢献のあり方について』を発表している。

それを引き継いで平成16年には、「岡山県における国際協力・貢献産業の創出調査」委員会が発足し、筆者がその委員長を務めた。この委員会は、途上国に対して協力し貢献できる産業を岡山県に創出できないか調査してくれという岡山県庁からの依頼を、中国産業活性化センターが受けて発足したものであり、その審議・調査の成果は平成17年3月に『岡山県における国際協力・貢献産業の創出調査報告書』（中国産業活性化センター発行）として結実した。岡山の人たちが途上国に対する貢献活動を通じて、そこに生きがい・やりがいを見出してほしいものである。

岡山・倉敷の伝統と特徴であるこの『芸術』と『国際貢献』をこの地のひとおこしとまちおこしにぜひ活用したいものである。

地域の個性化による活性化

いまや日本全国の街は画一化してしまった。どこに行っても同じようなビルや店の風景があり、同じようなファッションの若者が歩いている。人々の考え方もその話し方も似通ったものになってしまった。まさに全国のリトル東京化である。しかしこのような無個性化の進行の中で、人々は果たして自分の存在の基盤を感じとることができ、自分らしい生きがいを感じるができるのだろうか。

地上は無個性なビルが林立するだけだが、その地層の下にはそれぞれの地域固有の歴史や文化が眠っているはずである。住民はこの地層を掘り起こして、自己の、そして地域の本質を見極めることにより、自己存在の輪郭を明らかにすると同時に、これをまちおこしにつなげてほしいものである。

まさに、地域の自然・歴史・文化・風土を生かした個性化こそ、全国の画一的な大型ショッピングセンターに対抗して、商店街が生き残る1つの方策になりうる。

また、観光も地域の個性を生かさないと成り立つはずがない。どこへ行っても同じ風景・風物なら、人はどうしてわざわざ遠くまで出かけようとするだろうか。その地に行けば、そこでしか感じられないものを体験し、見ることができ、味わうことができるからそこへ行こうとするのである。

若者とシニアの交流による活性化

まちが元気になるためには、若者だけが元気になればよいとかシニアだけが元気になればよいというものではない、と考える。若い世代とシニア世代が交流する中で双方が生きがいを見出すことが大切ではないだろうか。若者とシニアの交流によるまちおこしをキーコンセプトにしたい。

以上を踏まえて、以下いくつかの提案をしてみたい。

2. 提案

提案1. イベント「川語り」

倉敷美観地区を舞台としたイベントの目玉として、川語りイベントを提案したい。

夜のしじまの倉敷川に一艘の船が浮かんでいる。その上で女語り部が朗々とした声で物語を語る。川岸のこちらには大勢の観客、対岸は舞台上で語りに合わせた無言劇が演じられる。舞台の背には大きくて白い布が空に向かってなびく。そしてさまざまな色のライトが語り部や演者や白布を照らしている。

ときには語り部が琵琶を奏でながら、別れた子供の哀切な物語を語る。母の乗る船が子供への思いとともに川を下っていく……

（無言劇を演じるのではなく、背景の白布にさまざまな色の光をさまざまな形であてて情景をつくったり、白布に影絵を動かして物語を暗示させるという方法をとれば、イベントの効果をもっと高める可能性がある）

（このイベントの実施により宿泊者数が増えれば、その収入の一部を演者に支払うようにする）

（語りのイベントを、修学旅行生の多いチボリ芸術村〔後述の提案7. 参照〕や古民家で若いひとたちや外国人に対して行い、日本の文化を感じてもらおうようにする）

提案2. 水と光の芸術

川語りイベントのない土・日曜日、休日は、倉敷川で水と光のイベントをおこなってはどうか。（川語りイベントと一緒にを行うと、目立つイベントとなる）

倉敷川の両岸に設置したたくさんのノズルから太さや勢いの異なった水が、さまざまな方向に噴射される。さまざまな方向に動き異なる弧を描く水流はときには交わり、人になったり、険しい山になったり。そしてサーチライトから色とりどりの光線が放射され、光に照らされた水流たちが踊っている。

提案3. アートビジネス・プロジェクト

筆者は、2007年度の1年間「コンテンツビジネス勉強会」を前任校の芸科大で実施した。メンバーは、大学生6名、倉敷ケーブルテレビ若手社員1名、地域SNS「スタンダード」の若手女性社長1名と筆者の計9名である。この勉強会では、映像・テレビ・音楽・アニメ・ゲームというコンテンツビジネスのそれぞれの状況や、コンテンツビジネスにおける著作権・資金調達・会計・配給・マーケティングなどの問題を勉強し、これからコンテンツビジネスはどう変わっていくか、またどう変わっていくべきかを議論する有益な勉強会となった。

この勉強会はもともと、日本をこれから支える中心産業になるといわれているコンテンツ産業を倉敷の地で興すこと、そして芸科大の学生がその中で活躍する道筋をつけることを願って実施したものである。引きこもり・ニートの若者の中には、アニメや漫画、ゲームになら関心があるという若者が少なくない。コンテンツビジネスの創出は、彼らに仕事を与え、なおかつ彼らが生きがいを感じかつ活躍できる機会を与える、という点でも重要である。

2008年度から芸科大は、芸術学部長ら教授と学生を中心に新たなプロジェクトを始めることにした。このプロジェクトの会合は倉敷のまちづくりセンターで行われる。個人的な希望であるが、この会合には芸術によるまちおこしに関心がある市民に多く集まってもらいたいと考えている。また、このプロジェクトのテーマないしコンセプトは「芸術によるまちおこしと仕事おこし」(仕事おこし=倉敷の地で芸術関係の仕事やビジネスを創造することによって、若者などが生きがいを感じる仕事やビジネスを創り、まちおこしにもつなげる)とし、(映画、音楽、アニメ、漫画、ゲームという)コンテンツだけでなく広範な芸術を対象にしたいというのが筆者の個人的希望である。

九州・大分の湯布院は、今でこそ街に美術館や土産物屋が目立ち、観光客があふれかえる一大観光地となったが、学生時代に筆者が別府から阿蘇まで徒歩で旅する途次立ち寄った湯布院は、田んぼの広がる田舎の小さな温泉町に過ぎなかった。それがこのような活況を呈し始めるきっかけを作ったのは、まちの青年たちであった。映画祭を催すなど、まちおこしに大いに奮闘した彼らの努力がついに実ったのである。倉敷もその気になれば、もっと元気で楽しいまちになると確信している。

提案4. 定住促進プロジェクト

倉敷商工会議所副会頭永田妙子女史を中心とした定住促進プロジェクトが2007年に立ち上

げられた。全国から退職後のシニアを倉敷に呼んでこの地に定住してもらおうというのである。日本政府も同じ方針を打ち出したが、倉敷は全国に先駆けてシニア定住促進の先進モデルとなるべきである。

筆者はこのプロジェクトに関する委員会の委員であったとき、シニアが芸科大で学ぶことにより学ぶ喜びを見出してほしいと主張・提案した。そしてこの会議に出席して筆者は、倉敷の外見、暮らしやすさ、楽しさをアピールすることも勿論重要だが、倉敷がシニアにとっての生きがいを満足させる何かを提供できる仕組みづくりが大切ではないかと思った。

そもそもシニアにとっての生きがいとは何か。シニアに限らないが、一般に人は自分の存在が他人から認められ、求められ、社会の中で何らかの役割を果たすことができれば生きがいを感じる。

シニアは若い世代に比べ、経験・知識、資金と（自由に使える）時間をより多く持っている。これを踏まえると、

①. シニアは自己のもつ経験や知識、資金と時間を（若い人や異分野の人や途上国などに）提供できることに喜びと生きがいを感じる。倉敷はこれらを提供できる場や仕組みを用意すべきである。具体的には、

○現役時代シニアはみな、それぞれの分野のプロ・専門家であったはずである。この経験・知識、技術をぜひ生かしてもらいたいし、生かせるはずである。

たとえば、かつて大企業の技術者だったシニアは、技術力の劣る中小企業に技術を伝授することができる。

また、インドやベトナムなど急速に成長する国の中で、車やバイク、農業機械など、求められている製品は高性能なものより安価なものであり、少し前の技術を使った日本製品の需要先として有望である。

カンボジアやラオス、ネパールのような貧しい途上国になると、貧困から脱するためにもう少し前の技術がほしい。

日本のシニア世代の元技術者や各分野の元専門家が活躍できる場は、**中小企業再生、国際貢献**などずいぶん広いのである。

○途上国が日本など先進国に輸出できる数少ない工業製品として繊維製品がある。そのデザイン・染色などの技術を向上するために、シニアの技術が求められる。（**芸術による国際貢献**）

○自分の得意分野の技術・知識をシニアのほかの人に伝授する。

○シニアの間で、シニアに合ったゆったりサービスを提供するビジネスを行う（たとえば、シニアに合った食事を提供する食堂をシニアの人たちが共同で経営する）。

○若い人に技術・知識や経験を伝授したり、ときには時間を提供する（たとえば料理や子育て支援）。

○意欲とアイデアはあるが、技術・知識や経験、資金、人的ネットワークの乏しい若い人の起業希望を審査し、合格した若者に対し技術と資金を提供する。（ただし、リスクに耐えられるシニアに限る）

○若い人たちの悩み相談にのる。（1人だと意見が偏る可能性があるので集団でアドバイスする。いじめの問題は学校がうまく対応できない場合に限る。いじめなどの問題では元教師やカウンセラーなど専門家を交える）

○高齢者の人生経験を経験の少ない若い人たちに話す会、あるいはネット上の公開。（それを素材に小説作成のコンテストはどうか）

○シニアの技術によるまちおこし。（まちが必要としていてシニアが提供可能な技術を見つけ、求める側と提供側をつなげるシステム作りが必要）

○シニアによるまちの美化。（花のあるまち、花まきゲリラ）

○シニアによるまちの安全。（子供の通学道の監視活動）

②. シニアは自分にないものを吸収し学ぶことに喜びを感じる。

現役の時代は時間や仕事に追われてできなかった、しかし時間に余裕ができたいま念願の勉強・習い事をしたいというシニアは多いはずである。

異分野のシニアから学ぶもよし、若い人からパソコンなどを学ぶのもよいのではないか。
（後述の「シニア大学構想」参照）

③. シニアは自分の趣味を充実させることに喜びや生きがいを感じる。

この点に関して、

倉敷が「シニアの芸術愛好家を全国から集める」ことを提案したい。その意義は、

○倉敷には美術館が多くあり、シニアの芸術愛好家の趣味を満足させることができる。

○倉敷に芸術愛好家が集まれば、芸術に関するイベントや企画が成立する可能性が高まるので、この地での芸術愛好家の楽しみが増えるばかりか、観光客が増えまちおこしにもプラスになる。

○芸術愛好家が集まれば、この地で規模の大きい芸術サークルを作ることが可能になり、お互いに刺激を与え合ったり、教えあったりすることも多くなる。

○シニアの芸術愛好家のなかには、この地において市民や観光客を相手にした芸術体験活動の指導者として活躍できる人もいるはずである。

○シニアの芸術愛好家は資金の余裕があるので、芸術作品を購入したり若手の芸術家のパト

ロンになることにより、この地で芸術家が育ちやすくなる。

○シニアの芸術愛好家が、自分がいままで収集してきた芸術品を倉敷に持ってくることで、芸術愛好家がこの地で作品を鑑賞できるチャンスが増えるし、この収集品を展示するミニ美術館が倉敷で多く開設される可能性が生まれる。

○以上により倉敷の芸術の厚みが増すうえ、この地に住もうというシニアが増える可能性が高まる。

また次に、「地域通貨を導入することにより住民同士のサービスのやり取りを増やす」ことを提案したい。

地域通貨とは、ある地域のなかでのみ通用する通貨のことであり、具体的には、

- ①. 通常の商品の売買取引にはなじまない、善意を含むサービス（住民同士の間での、肩たたき、掃除、読み聞かせなど）を対象にして、サービスを提供した者に地域通貨を与え、この通貨を他のサービスの享受に使用することにより、住民間でのサービスのやりとりを盛んにしようとするものである。あるいは、
- ②. 社会的には好ましいが、住民が積極的に行なわない行為、たとえば、古新聞の回収などを積極的に推進するために、古新聞を持参した者に地域通貨を渡す、というものである。

地域通貨は、ビジネスとボランティアの中間領域をカバーする。すなわち、おカネをもちょうほどのことではないが、無償よりも何か対価があればより促進するようなサービス活動を盛んにする工夫である。

提案5. 自由な住居移動システム

シニアは子供が独立して夫婦2人であることが多く身軽である。そして、退職後は趣味を充実させる生活や田園生活にあこがれたり新たな起業をしたいという、第2の人生を歩もうと考えるシニアが多い。そのため移住を考えるケースも多いが、転居先でうまくやっていけるという自信がないのでためらってしまう。また、たとえば田園で農村生活をずっと続けるのは退屈であると感じるシニアもいるだろう。いまの住居システムが定住を前提にしているから、このようなことがおこるのだと思われる。

そこで、いわば自由な住居移動システムとでもいうべき仕組みづくりを提案したい。

これは以下のような仕組みである。農村や島、街中などにある空家を登録しておき、その中からシニア（シニアでなくてもよいが）がある住居を選んだとする。そしてこの空家に一定期間試しに住んでみて、気に入ればここに定住してもよいし、気に入らなければ他の

住居を探しましたそこで一定期間試しに住んでみる。このように空家の選択と移動を自由にする。このような自由な仕組みのもとでは、農村と都市の間を、また夏は涼しい地域の住居、冬は温暖な地域の住居の間をしばしば自由に移動することも可能なので、退屈することがない。

倉敷定住化プロジェクトが、最初から定住のみを考える必要はないと思う。最初から定住ということになると、ためらう人が多いからである。試しにある期間住んでもらって気に入れば住んでもらえばいいとすれば、気軽に倉敷にくるシニアが増えるだろう。またたとえ、定住に至るシニアが少なくお試し居住のシニアが多いとしても、この仕組み実施後倉敷においてシニアの実質的な数が増えた後その数と経済効果は一定となるだろう。ちょうど、電車やバスの中の乗客は絶えず変わるが、乗客数と乗車から得られる収入は毎日ほぼ一定であるのと同じである。

提案6. シニア大学構想

『倉敷芸術都市構想』は、若者が大学からまちに出て芸術活動を中心にまちの活性化に貢献すると同時に自分の生きがいもみつけてほしいというものだった。

ここで次に私が提案したいことは、倉敷に居住し大学で学びたいという旺盛な学習意欲をもつシニアが大学に来て、芸術を味わい学問を学ぶことによって生きがいをみつけてほしい、そしてこのことがシニアの倉敷定住化を促進すると同時に、芸術によるまちの活性化に貢献するのではないか、ということである。

シニア世代を大学に招き入れる意義をまとめると、

- シニアの生きがいを形成する一助になる。
- 定住促進を通じて大学が地元倉敷に貢献できる。
- 大学教員と地元で定住したシニアの履修生との交流により、大学と地元との交流を促進することができる。
- 大学の芸術力や知的財産がシニアの履修生を通じて地元社会に還元される。
- シニアがもつ知識・人間関係・経験・資金と大学の知識・技術が連携して新しいビジネスが立ち上がったたり、新しいまちおこしが可能になる。
- 若い学生が意欲の高いシニアの履修生によりいい刺激を受けて彼らの学習効果が上がる可能性がある。
- 大学教員も社会人の学習意欲に応えるべくさらに努力する必要に迫られるので、教員の活性化に貢献する。

○少子化が進行し若い学生が減少することは避けられない状況の中で、大学にとっての新たな収入源となる。

大学で卒業資格を得たいと希望するシニアは少数で、多くのシニアはいくつかの興味のある科目だけを選んで学びたいという希望であろうと思われる。すなわち科目等履修生を希望するシニアが多いと思われる。課題は、科目等履修生の入学や受講に要する金額がリーズナブルかどうかである。できるだけ、大学はこの障害を避けるよう努力しなくてはならない。

また、担当教員の負担の問題という課題もある。講義科目なら受講者数が少々増えても負担増にはならないが、1人1人手取り足取り指導しなくてはならない実習科目は、受講者数が増えると教員の負担が大きくなる。

そこで、実習科目に関しては、基本的に非常勤講師に対応してもらうしかない。そして非常勤講師の授業を終え、なおかつ強い意欲と能力をもつシニアのみ専任教員の授業をとれるようにする。ただし、意欲・能力の点でふさわしいと専任教員から判断された少数のシニアは、最初から専任教員の授業をとれるようにしておく。

シニアが学ぶ大学は、文字通りの大学に限る必要はない。いわゆる市民大学であってもよい。また、この市民大学は、文字通りの大学にあってもよいし、チボリ芸術村や倉敷まちづくりセンターや国際交流センターのどこにあってもよい。

また、講師としての市民は、プロでもよいが大学生と（セミプロを含む）シニアが中心になってほしい。その講師が大学生なら、シニアと若い世代が交流するキッカケになる。シニアなら、ときには学びときには教える（つまり教え合う）ことによって生きがいを感じることができる。

シニア大学構想について、その他に、

○市民講師はプロとしての講師とボランティアやボランティアに近い講師の2種類に分けられる。前者の講師は、審査により講師として採用する。また講師にはレベルを付けて審査によりレベルアップするようにすれば、レベルを上げることが目標になり楽しみになる可能性がある。後者の、ボランティアに近い講師は、その講義に対して地域通貨を渡すことにする。

○芸科大やくらしき作陽大、またチボリ芸術村などで、芸術などを学ぶシニアのためのツアーやロングステイを企画してもいいかもしれない。

提案7. チボリ芸術村構想

岡山では現在チボリ公園をどうするか議論されている。倉敷市の支援が期待できないいまチボリ公園を廃止ないしただのふつうの公園にしてしまえば、倉敷観光の1つの拠点が失われてしまうし、チボリジャパンの雇用は維持できない。

一方で、倉敷は全国からシニアを集めてこの地への定住を進めようとしている。

チボリを観光拠点として維持しながら倉敷に滞在する観光客を増やしたい、シニアに定住してもらいたい、チボリジャパンの雇用を確保したいというのなら、これらの要望を全て満たす構想—チボリ芸術村構想をここで提案したい。ただし、ここでいう芸術村は、公園全体を芸術村にするということで、既存のものとは異なる。

その内容は、

○公園内の施設や遊具はほとんど現状のまま維持する。

○チボリ公園の柵に沿って環状に取り巻く長期宿泊施設を建設する。そしてこの中に主に芸術家とシニアに居住ないし長期滞在してもらう。ここでの滞在によって倉敷が気に入った人には、街中の古民家を紹介するなどして定住してもらう。

○芸術家や、芸術愛好家のシニアがこの園内の既存の施設を利用して芸術活動や芸術パフォーマンスをしやすい環境を整える。

○観光客や芸術愛好家のシニアが芸術体験を楽しめるようにする。これにより観光客が倉敷に長時間滞在することになる。

○コンテンツビジネスなど芸術を使ったビジネスの創造や、芸術科学融合型産業の拠点とする。また、芸術と科学の協調・交流を試みる場とする。

この園内ではシニアが集中して滞在しているので、シニアに対するサービスを提供しやすい。たとえば、

○敷地内は公園なので、シニアがのんびりゆったりした気持ちで過ごせる。また、柵で囲っているので、園内は安全である。

○近郊の農村にシニア用農園を、また瀬戸内海の島に魚つりができる施設をつくり、それらと園内を結ぶバスを不定期に運行させる。

○園内にシニア向け診療施設やケア施設を設置する。また必要があれば、倉敷の病院に通う車を運行する。

○商店街に買物ツアーに行く車を（車椅子や世話をする人と共に）運行させたり、商店街の人達が園内に出前販売する。これにより、シニアに便宜をはかるとともに、商店街の活性化につなげる。

また、シニアが園内に集中して住んでいることと、園内に近く of 保育園・幼稚園の子供が遊びに來たり、小・中学生の修学旅行生が多く訪れるので、若い世代との交流によりシニアが生きがいを感じる機会がふえる。たとえば、

○保育園児・幼稚園児とシニアが園内でともに遊ぶなかで交流ができる。

○園内にはさまざまな仕事を経験してきたシニアがいるので、シニアにより小・中の修学旅行生対象に仕事教育ができる。たとえば、シニアの指導により簡単な料理や大工などの仕事を子供たちに経験してもらう。

○修学旅行生の中に悩みを抱えた子供がいれば、シニア（あるいはシニアグループ）がその悩みを聞いてあげる。

また、

○シニアが園内でシニアのためのゆるやかな仕事をしてお金を自ら稼ぐことができる。

このチボリ芸術村の運営・管理をおこなう民間会社をつくり、この中にチボリジャパンの従業員を再雇用して雇用を維持する。修学旅行生を含む観光客が園内に入る入園料は低額か無料にし、芸術・仕事体験の料金やパフォーマンス鑑賞料、シニアに対するサービス提供料を主な収入源とする。

なお、クラブウがこの会社を経営するなら、地代コストは不要になる。

提案8. 倉敷観光

倉敷のひとは、倉敷を訪れる観光客が美観地区に滞在する時間が短く、宿泊もしてくれないと嘆く。倉敷の地で芸術体験や仕事体験をしてもらえば滞在時間ももっと長くなるし、目玉となる夜のイベントを増やせば、宿泊客も増えるのではないかと。上記のチボリ芸術村での芸術・仕事体験や夜の川語りイベントだけでなく、たとえば、美観地区周辺に点在するそれぞれの古民家で、外国人観光客などに着物を着て日本舞踊を踊ってもらったり、茶や生け花を楽しんでももらったり、剣舞を見学したり、ミニ映像シアターで日本の古い映画を鑑賞するなど、さまざまな試みをやってみてはどうだろうか。

また、倉敷の商店街を活性化する方策として、もっと観光客を取り込むことを考えたほうがよいのではないかと。その1つの方法として、ツアーの観光バス会社と連携してはどうかと。たとえば、観光バスが観光客を美観地区に降ろし、観光客がひとまわり美観地区を回ったあと、観光客を商店街に誘導し商店街を歩いてもらう。各商店には倉敷特有の名産品を開発してもらってそれを店頭の名産品コーナーにおく。観光客が名産品を買ったら、その（これに

関わる商店全体の)売上高に応じてバス会社に報酬を支払う。こうすれば、よろこんでバス会社が観光客を商店街に連れてくる。そしてこれにより商店街が潤うというよい循環がおこる。

そして、商店街を歩き終わった観光客を商店街の北端からバスに乗せ、チボリ芸術村につれていったり、他の観光地に運ぶのである。

その他に、

○最近日本国内には韓国や中国などからの外国人観光客が目立つ。彼らを取り込まないテはない。たとえば、韓国や中国からの観光客が成田に降り立ち、その後東京(秋葉原や銀座など)、箱根・富士山、京都・奈良、倉敷、瀬戸内海クルーズ、別府、阿蘇山などを経て、福岡空港から韓国や中国に帰国するというルートを企画・開発すれば、通ridorの途中にある倉敷に外国人観光客がおのずから増えるだろう。

提案9. 上記提案とビジネス

上記提案のうちシニアに関するものは、シニアが自らできるものであるならば、できるだけシニア自身が有償であるいはボランティアとして行うのがよいと思われる。これ以外の専門のプロに任せるべき部分に関して、次のようなビジネスが考えられるかもしれない。

(1) 倉敷のまちおこし

○まちおこしイベントの企画と運営。

倉敷の屏風祭りは、倉敷商工会議所の岡副会頭が昔の文献からこの事実を掘り起こされたことから企画された。倉敷のアイデンティティを住民が自覚しまちに誇りをもってもらうために、住民が昔の文献を探して眠っている倉敷の歴史や文化を掘り出したり、地元在住のシニアから倉敷に関する昔の物語や事実を聞き出す企画をしてはどうか。

そして、この掘り出したものを住民に提示して、倉敷らしいイベントのアイデアを募るというコンテストを実施してはどうだろうか。

これらの企画やこれに基づくイベントの実施・運営をボランティア、NPO、民間企業が行なう。

○倉敷観光を全国や外国にアピールする。

倉敷ケーブルテレビは、地元の観光に関する映像情報を豊富にもっているはずである。また、地元雑誌・ミニコミ誌、地域SNSもこの地における観光情報を多くもっていたり掘り出すことができる。このような観光情報を全国や外国にインターネットなどを通じて発信してみてもどうか。

また、倉敷を訪れた観光客に対して倉敷の観光情報を携帯電話で提供できるシステムを作ってはどうか。たとえば、倉敷駅のコンビニなどに代金を支払えば、街を観光するとき、携帯電話上で美術館の催しを案内したり、陶芸など美術品を売る各店などの特徴や位置情報などを地図付きで提供する。

- 商店の商品を豊富にするため、全国各地域（さらには外国の）のSNS間で**商品情報**を交換する。

商店が大規模商業施設に対抗するためには、地元固有の生産物・製品を販売することと、（逆に地元から）遠く離れた地域の珍しいものを販売することにもっと力を入れたほうがよいと思われる。これを全国の商店街が、それぞれの各地域の地域SNSや地元雑誌・ミニコミ誌、地元ケーブルテレビ間で情報を交換することによってできるのではないと思われる。

- 倉敷芸術科学大学芸術学部とくらしき作陽大学音楽学部、そして地元芸術関係者、ビジネス界が連携して、（映像・音楽・アニメ・漫画・ゲームなどの）コンテンツビジネスを興してはどうだろうか。

- 意欲と夢がある少年・少女や起業家志望者**を掘りだして売り出す。

地域SNS、地元雑誌・ミニコミ誌、地元ケーブルテレビによって掘りだし売り出す。

（2）シニアに対するサービスの提供

- シニアが保有する技術とその技術を必要とする**中小企業**を結ぶビジネス。
- シニアが保有する技術・知識とその技術・知識を必要とする**途上国**を結ぶ。
- シニア間の**教え合い**の企画と運営。

どのシニアがどのようなことを教えることができるのかを調べ、学びたいというシニアを集めて、この教え合い企画を運営する。

- 全国のシニア芸術愛好家に**倉敷定住**を呼びかけたり、倉敷に滞在・居住するシニア芸術愛好家間の**情報交換の仲立ち**ビジネス。

全国各地域の地域SNSやケーブルテレビの間での情報交換システムを構築することにより、これを通じて倉敷から全国のシニア芸術愛好家に倉敷定住を呼びかける。また、倉敷に滞在・居住するシニア芸術愛好家の情報交換（同好の人達を集めたり、芸術活動への参加や鑑賞を呼びかけたり、芸術作品情報を交換したりすることなど）を行なう仲立ちをする。

- 自由な住居移動の斡旋**ビジネス

